

17日投票／即日開票の結果は、反対70万5585票、賛成69万4844票。50・38%と49・62%。『反対』が多数だった。しかし僅差、薄氷を踏む思いで開票を見守った人は少なかつただろう。

「大阪市民の理性と良識の勝利であり」と共産党の山下書記局長は述べた、と19日付『赤旗』の記事である。考え込んだ。

49・62%の人達は、「理性も良識も」持ち合わせなかったのか。そんなことはないだろう。「一人ひとりの市民が真剣に考えた結果であり」とも山下氏は言う。この「ひとり一人」は49・62%の市民のすべてを除外出来るわけではないだろう。投票したすべての市民が、深淺の違いはあれ「真剣に考えた結果」と観るべきだろう。そう観るのが礼節だろうと思う。

そんなことはない。『真剣に考えた』結果の票数だ、勝敗だ、と言うのはきれいごとだ。頑迷固陋の人たちがいるのだ。啖呵にも似た独善的で高圧的な物言いは閉塞感をぶつ飛ばしてくれて、未来に夢を持たせてくれると、橋下氏を溺愛する妄信の人達は、都構想など考える気はさらさらなくて、かれの一言一句に酔いしれて「賛成」票を投じたのだろう。まあ、「理性と良識」に「縁なき衆生」と言つて差し支えない。

安倍晋三氏と橋下徹氏、この二人とそのファンたち、率直に言つて、暗愚の主権者はいるのだ。権力に凭りかかる弱者、権力におもねる弱者、権力にひれ伏す弱者、権力にお裾分けを待望する弱者、権力を後ろ盾に別な弱者を脅す弱者。こういう弱者たちを迷妄から覚醒させる秘薬は何か。

生まれてから14年あまりが侵略戦争の時代であつて、ぼくはいっぱしの軍国少年に育つた。天皇をアラヒトガミと、神国で神風が吹く聖戦と妄信していた。弱者を愚者にしたてる権力の術は狡知を操つて巧みであつた。ぼくは、生まれつき能力が愚鈍であつたのではなかつた、と敗戦後に気づいたのだ。もう権力に

弄ばれないぞと心したのだ。精神の、理性と良識の、覚醒が、殺伐・荒涼の中から始まつたのだ。悲惨の自覚あつての人間力の再生と言えるか。

『党首討論』で安倍晋三という人の実像が鮮明に

後方支援が可能な地域は従来の非戦闘地域より広範囲になれば、自衛隊が戦闘に巻き込まれるリスクは比例して高まる、というのは適正な理屈だろうに、リスクが増すか否かは答えなかつた首相。「存立危機事態」など三要件を満たした場合の他国領土も含む武力行使を法律上の前提としたはずなのに、「他国の領土、領海、領空での武力行使はしない」と答える首相。

「本質を覆うような答弁は法案と矛盾しかねず、根幹にかかわる」と『毎日』の「社説」が指弾。過去の戦争について「間違つた戦争と考えるのか」という質問に首相は答えなかつた。

首相は「戦後レジームからの脱却」を唱えるが、そのスタートは「ポツダム宣言」受諾だ。共産党の志位委員長がこの『宣言』の第六項と第八項を引用して首相の歴史認識を糺したのだが、「私は未だその部分をつまびらかに読んでおりませんので、承知はしておりませんので・・・」と。「戦後レジーム」とはなにかを認識せずして、そこからの「脱却」を叫ぶという暗愚と迷妄。

この第六項はこうだ。「吾等は、無責任なる軍国主義が世界より駆逐せらるるに至るまでは、平和、安全及び正義の新秩序が生じ得ざることを主張するものなるを以て、日本国民を欺瞞し之をして世界征服の挙に出づるの過誤を犯さしめたる者の権力及び勢力は、永久に除去せられざるべからず。」

日本国憲法前文の理念と戦争放棄の第9条の人類史的意義を安倍晋三氏は全く理解していないのだ。